新聞記事より

「相中相高八十年」と「相中相高百年史」を基にした歴史の流れの中に、地方紙に載った馬城会員の方々や現役生の活躍場面をときどき挟んでいる。多少違和感はあるが、ご容赦頂きたいと思っています。以下は、福島民報の記事の転載です。

2021年（令和3年）5月22日（土曜日）

立谷市長（右から3人目）に要望書を手渡す遠藤会長（左から3人目）

中村城跡 国史跡指定を

未来考える会と観光協 相馬市長に要望

組織体制強化求める

相馬市にある県史跡「中村城跡」の国史跡指定を目指し活動している「相馬中村城の未来を考える会」と相馬市観光協会は十九日、立谷秀清市長に要望書を提出した。市教委が二〇一六（平成二十八）年に策定した「史跡中村城跡保存管理計画書」に基づいた史跡整備の着実な履行や、国史跡指定に向けた検討を行うための体制強化などを求めている。

考える会の遠藤政弘会長と渡辺義夫、新妻寛両副会長、同会顧問を務める草野清貴市観光協会長が市役所を訪れ、立谷市長に要望書を手渡した。

要望書の内容は①保存管理計画書のうち、短期整備計画の遅滞ない履行②国史跡指定に向けた検討のための専門職員配置や組織体制強化―などの三項目。

遠藤会長らは、中村城跡は「中世から近世の相馬の歴史を知る上で貴重な史跡で、相馬市だけでなく旧中村藩の市町村にとっての歴史遺産」とし、国史跡指定に向けた保存・活用の施策を「前向きに検討してほしい」と立谷市長に訴えた。

相馬市の居城だった「中村城跡」は一九五五（昭和三十）年、県史跡に指定された。考える会は観光、神社、郷土史研究の関係者らで構成し、中村城跡の歴史文化継承と周知、観光誘客への活用を目的に二〇一七年十二月に発足。これまで十六回の会議を重ね、同城跡の国史跡指定推進を目指して行政や関係機関への働き掛けを進めている。

※遠藤政弘氏：昭和 40 年卒

※渡辺義夫氏：昭和 54 年卒

※新妻　寛氏：昭和 36 年卒

※草野清貴氏：昭和 40 年卒

和3年）4月15日（木曜日）

スポット

相馬市副市長に就いた 阿部（あべ）勝弘（かつひろ）さん

「個々の力を引き出して組織力を高め、常に挑戦できる環境を整えたい」。立谷秀清市長の補佐役として職員をまとめ、施策の実現を目指す。

相馬市出身。相馬高、福島大経済学部卒。平成七年に市役所へ入庁し、企画政策課長、総務課長、企画政策部長を歴任した。今年三月に市職員を辞し、四十代での副市長就任となった。

「対話」を重視する。日々変わる社会では「人々の知恵を集めて成果につなげることが重要」と説く。新型コロナウイルスのワクチン接種をはじめ、地方創生や教育、福祉などの課題にも部署を超えた全庁的対応で臨む考えだ。

大学ではボート競技で国体に出場した。

※平成３年卒

（5 月 22 日　村山）